

Crescendo

2025.12
vol.161

M E D I K I T A R T F O R くれっしえんど

『飛び立つ前に』 俳優 岡本圭人 独占インタビュー

年末のメインディッシュ!?
唯一無二の人気ギタートリオ
「TRES」が贈る、至福のひと時

これであなたもホルンを語れる!
加藤昌則の笑って納得!
レクチャー型コンサート

宮崎に「熱い演奏」を!
日本フィルハーモニー交響楽団

おとなも子どもも全身で楽しむクラシック
みやざきの舞台芸術シリーズⅢ
「体感型コンサート」



メディキット 県民文化センター
MEDIKIT ARTS CENTER

広報誌

Avant de s'envoler

Written by **Florian Zeller**
Translated by **Atsuko Saito**
Directed by **Ladislav Chollat**

飛び立つ前に

2021年に上演したフロリアン・ゼレール作『Le Fils 息子』。そのゼレールによる本作『飛び立つ前に』は、世界各国で上演され、国際的に高い評価を受けている。そして、今年待望の日本初上演が実現。11月下旬の東京公演を皮切りに、日本各地での上演が予定されており、宮崎では2026年1月に上演となる。『Le Fils 息子』で主演を務め、2024年の『Le Fils 息子』『La Mère 母』同時上演のいずれにも出演し、第59回紀伊國屋演劇賞個人賞を受賞した岡本圭人。本作で物語の中心人物となる橋爪功や、これまで共演を重ねてきた若村麻由美らとともに稽古に励む岡本に、作品について語ってもらった。

(2025年10月末取材)

—『Le Fils 息子』の上演、そして今回PRで宮崎にお越しいただきましたが、約4年ぶりに劇場に来ていかがですか。

この劇場は大きな公園が隣接していて、美術館や図書館も近くにあって、芸術に触れあえる場所なんだなって感じています。4年前に来た時、劇場までこういう行き方しますよ、って自分のSNSで紹介したりしたことを思い出して、懐かしかったです。駅からちょっと遠いんですよね(笑)。でも、それもいいですよ。東京の劇場はいろいろなものが密集している場所にあるけれど、これだけ広いと舞台の余韻をより楽しみながら帰っていただけたのかなって。



—『Le Fils 息子』での、宮崎のお客さんの反応はいかがでしたか？

すごくしっかりと観てくださっている印象を受けました。静かな時はとても静かで、やっている側からするとすごく集中しやすく、真剣に観てくださっているんだなと、ありがたかったですね。

—『飛び立つ前に』の台本を最初に読んだ時の感想を教えてください。

自分の家族のことを思い出したりしました。フロリアンの作品って、家族の本質といったものが普遍的に描かれているので。あと、ストーリーが本当に難しい。いろんな解釈ができるので、よく分からなかったんですが、どんな解釈もできる描き方をされていて、それがやっぱり面白い。『Le Fils 息子』『La Mère 母』でも、観る方によって感想が違って、「あれはああいうことだったのかもしれない」って話しているのを聞いたりして、それもまたひとつの新しい楽しみ方だと思います。どう感じたか、どう思ったか、どういうストーリーなのか、それらをお客さんに委ねる。それぞれの感性で、それぞれの家族のことを思い出してほしい、そんな思いを感じました。

—さまざまな解釈がある作品を、稽古場ではどうつくっているんですか？

演出家のラッド（ラディスラス・ショラー）がすごく引っ張ってくれていて、ここはこう



俳優 岡本圭人

2006年より芸能活動を開始し、2018年から2020年までの2年間はアメリカ最古の名門演劇学校であるアメリカン・アカデミー・オブ・ドラマティック・アーツへ留学する。卒業後は、舞台やドラマなど俳優業中心に活躍。2021年には本作と同じくフロリアン・ゼレール作×ラディスラス・ショラー演出がタッグを組んだ公演『Le Fils 息子』（2021年）でストレートプレイ初舞台・初主演を飾る。また、2024年に再演された際には、その演技力が認められ紀伊國屋演劇賞を受賞した。

いう風に演じてほしい、って演出してくれそうですね。その演出がとても面白くて、求めるものや見せたいものというのが、俳優の自分たちが想像するものよりももっと上のもので、それを表現するために、一生懸命稽古しています。思いがけないことが起きたり、想像しなかった結末を迎えたりするので、それは観ている方に楽しんでいただける点だと思います。

—この台本を読んで、すごく不思議な世界観だなと感じました。その中で、岡本さんが演じられる“男”という役について、この作品においてどんな意味合い・役割があると考えていらっしゃるでしょうか。

“謎”ですよ、自分で演じていてもそう思います。ポールという役名はあるんですけど、台本には“男”としか書かれていなくて、時には演出家から「全部ポールというわけではなく、ほかの人物の時もありえる」と言われて、「どういうこと？」って。だから観ている人も「あの人、どういう人なんだろう」って思うんじゃないかな。そういうミステリアスな要素があって、家族の一員ではなく家族の外からやってくる“男”という設定なので、家族の和を乱したり、時には家族の真実を伝えるようなこともしたり、いろんな要素を持っている役だと考えています。結構難しい役なので、今いいバランスを探している最中ですね。

—舞台上での存在の仕方が難しそうですね。難しい。たとえば、しゃべらないでずっと舞台上にいるというシーンがあって、しかも台本には何をすることが書かれているわけではないんですよね。今も稽古しながら、「これ合っているのかな」「ここにいていいのかな」って試行錯誤しつつ、ラッドと話し合いながら稽古しています。

—橋爪功さん演じるアンドレと“男”はどういう関係性ですか？

この作品の中心になっている人物がアンドレで、家族の存在や会話が彼にいろんな影響を与えています。自分の役にもそういう部分があって、どういう風に影響しようかというのには考えています。最終的には「一緒にできて良かった」って言うてもらえるように、ラッドの演出に応えつつ、アンドレにもいい影響を与えて、作品の世界により奥行きがもたせられればと思います。



アンドレ役 橋爪 功

—岡本さんの思うラディスラス・ショラーさんの演出の魅力について教えてください。

ラッドは日本語が分からないはずなんですけれど、毎回、日本語が分かるんじゃないかなって錯覚してしまうぐらい、演出するときのノート（演出指示やフィードバックなど）が的確ですね。「あのセリフをもっとこういうことを思いながら言ってほしい」って言われると、なんで日本語が分からないのにその違いに気づけるんだらうって。でも、言葉が分からないからこそ、感情とか言葉じゃないもので、その人物の在り方や関係性を見せてほしいと言って、それはとてもいい演出だなって感じています。言葉があると、どうしても言葉にしか頼らなくなってしまう。でも、ラッドはどのようにその場にいるかだったり、言葉の裏にあることをとても綿密に教えてくれる。だから、彼が面白いって言っているシーンは、演じる側も面白いし、観ている人にとっても面白いんだらうなって思いますね。彼がいいっていうものは、たぶん日本語が分からない方でも楽しめる、彼の演出にはそういう魅力がありますね。

—『飛び立つ前に』の魅力について教えてください。

個人的には自分の両親が親を亡くした時にこういう感覚だったのになって、自分の家族を想ったり、自分の経験と照らし合わせたりしてしまう、そういう作品でもあると思って。あと、フロリアンが書いた3部作『Le Père 父』『La Mère 母』『Le Fils 息子』を観たり、台本を読んだりすると、この人ってこういう考え方をしていて、こういう風に世界が見え

ていたのかなとか、ふと考えてしまう時があって。普段自分の世界のことしか考えなくて、家族や友人がどうしているかを考えているかまでは、なかなか考えが及ばないですよ。フロリアンの書く作品は「この人はこういう経験をしてきたのかもしれない」って想像力を掻き立てくれる。作中の誰にでも共感できるし、悪い人が出てこない。でも、誰も悪い人がいないからこそ、物事が悲劇的な様相を帯びることもあって。人間の本質、そういったものが見えてくる。台詞はすごくシンプルなのに、もしかしたらこういう風にあの人は世界を見ていたのになって、想像してしまえますね。

—翻訳劇に数多く出演されている岡本さんにとって、翻訳劇の魅力・面白く感じているところを教えてください。

翻訳劇に出ることが多いですが、日本の作品もすごく好きです。日本と海外の作品を比べると、個人的な感覚ですが日本の作家さんは、ちょっとひいた目線で世界を見ているなと感じることがあります。それは、日本は海外に比べて自己主張がとても少なく、でも自己主張がない代わりに優しさというかそういう美しい感情の表現があって。海外の戯曲や海外の人たちを見ると、自分の主張をぶつけ合うこともあるんですよね。けれど、自分は翻訳劇をやるときに原文を読んでから挑んでいるんですけど、読んでいて「自分のことをもっと話さないとな」って思ったりして、そういう違いは魅力に感じますね。あと、個人的に古典がすごく好きで、日本も海外もそうですけど、以前「若村麻由美の劇世界」（2024年）という舞台で、紫式部の源氏物語を読んだ時に、1,000年も前に書かれているのに今でも通じるものがあるなと感じるし、シェイクスピアも400年前に書かれているのに、人間って全然変わっていないんだなって感じて、面白いですよ。だから、日本でも海外でも人間というものは一緒、文化も言葉も違うけれど、人というのは世界のどこでもいつの時代でも変わらないなって。



マドレーヌ役 若村麻由美
『Le Fils 息子』『La Mère 母』など岡本と数多く共演。

—海外の古典はどういう作品が好きなんですか？

ギリシャ悲劇も好きですね、劇中で凄まじいことが起きているなって思うし、自分が出演した『オイディプス王』も物語や世界観に圧倒されましたね。シェイクスピアの『ハムレット』や『マクベス』といった悲劇も好きで、悲劇って読んだり観たりすると、その先に光が見えてくる気がするんです。悲劇に触れることで、じゃあ自分たちはどうやって今を生



きるのか、あらためて考えさせられますね。

—今後、こういう舞台をやってみたい、こういうことにチャレンジしてみたい、ということはあるですか？

翻訳劇ももちろん興味はあるんですけど、日本の古典にも興味があります。翻訳ってすごく時間がかかるんですよ。でも、日本の古典はそのままその言葉でやると、自分のからだの中にあるDNAではないけど、そういったものがうずくように感じます。翻訳劇は、自分は英語ができるので、演じることももちろんできるんですけど、日本人の自分がどう演じてもポールにはなりきれない、説得力に欠けるなと感じることがあります。もし自分がお客さんの立場だったら、たとえば『ハムレット』だったらデンマークの人が演じているのを観てみたいなって(笑)。日本の古典も一緒に、日本のものを海外の方が演じるというのも、解釈や演出の違いがあってももちろん面白いんですけど、でも日本の作品を日本人がやって海外に届ける、ということができたらいいなって思いますね。

—最後にお客さまにメッセージを

2021年に宮崎で『Le Fils 息子』を上演した時、お客さまのエネルギーというか温かさ、そういったものをすごく感じて、またいつかこの劇場の舞台に立ちたいと本当に思っていました。それがこの『飛び立つ前に』という作品で叶うことがすごくうれしいです。皆さんがどういう風にこの作品を観て、どういうことを感じていただけるんだらうか、とても楽しみにしています。作品自体も、観て良かったなと思ってもらえる作品に仕上がっていると思いますので、ぜひ楽しみにして、観に来ていただけたらうれしいです。お待ちしております。

2026

1/17・18日

『飛び立つ前に』
両日とも14:00開演

会場：演劇ホール
作：フロリアン・ゼレール
翻訳：齋藤敦子
演出：ラディスラス・ショラー
出演：橋爪功、若村麻由美
奥貫薫、前田敦子
岡本圭人、剣幸

TRES

トレス

沖仁×大萩康司×小沼ようすけ

クラシック・ギター界の第一線で活躍する大萩康司さん、
フラメンコ・ギター界の第一人者・沖仁さん、
ジャズ・ギターの名手・小沼ようすけさん。
トッパンナー3人による、ギタートリオ「TRES(トレス)」が、
この冬、ついに宮崎にやってきます！
今年デビュー25周年を迎えた、
宮崎が誇るギタリスト・大萩康司さんに、
「TRES」の魅力をたっぷりと語っていただきました。



左から:小沼ようすけ(ジャズ・ギター)、大萩康司(クラシック・ギター)、
沖仁(フラメンコ・ギター) ©Yukitaka Amemiya

Q. 宮崎でのTRES公演が決まったとき、 どんなお気持ちでしたか？

東京・銀座のヤマハホールでのコンサートが発祥のこの「TRES」を、やっと地元の皆さんに聴いていただけること、しかも今年は自分にとってCDデビューしてから25周年にあたる年なので、そういう節目の時にそれぞれバックボンの違うジャンルの尊敬する音楽家とともに、自分の生まれ故郷で演奏させていただけることが、とにかく嬉しく感じています。

Q. 沖仁さん、小沼ようすけさんを、それぞれどんなギタリストだと感じていらっしゃいますか？

沖さんも小沼さんも私の4つ上の先輩なのですが、おふたりちょうど私の実兄と同一年で、勝手に兄と弟のような存在として感じております。ものすごく端的に申しますと、沖さんのカッコいいフラメンコでの表現は、情熱的で瞬間最大風速80メートル位のアグレッシブな部分もあるので、例えばスポーツ万能な兄に憧れるような気持ち、そして小沼さんのその引き出しの多い表現は、たくさんの自分の知らない

宮崎が誇るギタリスト 大萩康司



小林市出身。高校卒業後、渡仏。パリのエコール・ノルマル音楽院、パリ国立高等音楽院で学ぶ。その後キジアーナ音楽院で学び、4年連続最優秀ディプロマを取得。ハバナ国際ギター・コンクール第2位及び審査員特別賞受賞。NHK「トッパンナー」「ららら！クラシック」、MBS「情熱大陸」、テレビ朝日「題名のない音楽会」等出演多数。

©SHIMON SEKIYA

いおもちゃを持っていて、次はどんなものを見せてくれるんだろうというワクワク感を持っています。

Q. TRESのリハーサルや舞台裏での 楽しいエピソードがあれば教えてください。

我々TRESのリハーサルは、時々合宿もするのですが、アルコールを一切入れずに楽しすぎてとにかくギターを弾きまくっている、というのが面白いです。それぞれ自分に持っていないものを持っていることへの発見が新鮮で何物にも代え難いほど楽しいのです。それぞれ20数年も違うジャンルの前線で活躍してきたにもかかわらず、いざ3人で弾いたときに、そのジャンルという境界線がふとなくなる瞬間が「TRES」だなあと感じます。

Q. 最後に、故郷・宮崎の皆さん、 そしてお客様へ、メッセージをお願いします。

私たちTRESのコンサートでは、フラメンコ、ジャズ、クラシックそれぞれの美味しいところが聴ける、料理でいうとまるでアラカルトのようなライブとなっております。メディキット県民文化センターの最高の音空間とともに、年末のメインディッシュをぜひ味わっていただければ幸いです！

公演情報

12/21 **TRES**
— 沖仁×大萩康司×小沼ようすけ —
13:30開場 / 14:00開演

会場：演劇ホール
出演：TRES 沖仁（フラメンコ・ギター）
大萩康司（クラシック・ギター）
小沼ようすけ（ジャズ・ギター）
曲目：当日発表予定

加藤昌則の 粹なり! クラシック

クラシック音楽には「難しそう」「敷居が高い」そして「長い」といった少しネガティブなイメージをお持ちではないですか？本シリーズでは、教科書には載っていない作曲家や作品のお話、ホルンについてわかりやすい解説を交えてクラシック音楽の面白さをお伝えします！
公演の構成・解説・ナビゲーターには、全国各地でレクチャー公演を行い好評を博している加藤昌則を迎え、クラシック音楽を楽しく徹底解剖していきます！

公演テーマ 「あなたは本当にホルンを 知っていますか？」



加藤 昌則
(ピアノ/ナビゲーター)

本公演のナビゲーターである加藤昌則さんから
皆さまへメッセージいただきました！

Message

ホルンは古くからある楽器で、さまざまな場所で使われていました。
ホルンの源流まで辿れば、ホラ貝だってホルンの仲間(!?)。
知っているようで知らないホルンのアレコレ、実演も交えてご紹介しちゃいます。そして意外に音を出すのが難しいのもホルン。それをまるでクラリネットのように自由自在に扱ってしまうのがこの人、福川伸陽さん。彼の凄技も堪能してもらおうと思うのです。知れば知るほど興味深いのがこの楽器、知れば知るほど楽しいのが音楽。知れば知るほど小粋な人になれちゃう!?そんなコンサートです。トークに演奏に、お楽しみください。



福川 伸陽
(ホルン)

公演情報

2026
2/1 加藤昌則の「粹なり!クラシック」
「あなたは本当にホルンを知っていますか？」
13:30開場 14:00開演

会場：イベントホール
出演者：加藤昌則(ピアノ/ナビゲーター)
福川伸陽(ホルン)

プログラム：・L.v.ベートーヴェン作曲：ホルンソナタ ヘ長調 作品17
・加藤昌則作曲：アンホルニズム ほか

第51回九州公演

日本フィル

in Kyushu 2026 宮崎

1975年から始まった日本フィル九州公演は、2025年2月に第50回の節目を迎えました。

今回51回目の公演はマエストロに藤岡幸夫氏、ソリストに周防亮介氏を迎え多彩なプログラムをお送りいたします。本公演の聴き所を日本フィルハーモニー交響楽団コントラバス奏者の鈴村優介さんにお話しをお伺いしました。



ヴァイオリン
周防亮介さん
©JUNICHIRO MATSUO

指揮
藤岡幸夫さん

鈴村さんはこの九州ツアーは何度目となりますか？

色々と思いがあがるかと思いますが、宮崎での一番の思い出などございますか？

僕は、2015年の12月に日本フィルへ入団しました！翌年の九州ツアーから毎年参加しているので、今回で11回目となります。九州ツアーは毎年各公演とても楽しみにしているのですが、中でも宮崎公演は特別ですね！

個人的にアイザックスターンホールは国内でもトップクラスに良いホールだと思っていて、日本フィルの特徴でもある弦楽器の重低音の響きや、金管楽器の輝かしいサウンドを生かすことのできる素晴らしいホールなので、毎年宮崎で演奏できる事を楽しみにしています！



コントラバス奏者
鈴村優介さん

今回の第51回目の九州ツアーですが、指揮者には藤岡幸夫さん、そしてソリストには周防亮介さんをお迎えしての公演となりますね！お二人の印象などあればお願いします。

まず指揮者の藤岡さんについてですが、大変エネルギーでアツい人ですね！これまで数多く共演をさせていただきましたが、毎度リハーサルから大変にエネルギーです!!今回演奏させていただくストラヴィンスキー作曲「火の鳥」では藤岡さんの指揮のもと、我々演奏家もお客様も、気付けばみんながエネルギー!!!そんな演奏になると思います!!!!

また、本公演ではマエストロによるトーク解説付きとなるのでこちらも是非お楽しみいただければと思います。



© 飯田耕治

周防さんとの共演では「シベリウス作曲ヴァイオリン協奏曲」がとても印象に残っています。「艶」と「繊細さ」がありながら「力強さ」も兼ね備えている美しい音色がとても魅力的な方だと感じています。今回のブルッフの協奏曲ではどのような演奏をされるのか、僕もとても楽しみです!!

今回のプログラムで鈴村さん一押しの曲目などあればお願いいたします。

ブルッフ作曲のヴァイオリン協奏曲は大好きな曲です！せっかくこのような機会をいただいたので、是非コントラバスに注目してみてください。低音に意識を向けながら聴いてみると、曲の印象が今までとは違って聴こえることもあり、新たな発見をしていただけるかもしれません。

最後に、宮崎の日本フィルファンの皆さまに一言お願いいたします。

年々ご来場いただくお客様が増えており、我々日本フィルへ関心を持っていただけることとても嬉しく思っております。そして、毎年この公演の開催のためにご尽力いただいている日本フィル九州公演宮崎実行委員会の皆さま、今年からは劇場様にも共催に入ってください、心より感謝申し上げます。今年は藤岡幸夫さん指揮のもと宮崎の皆様「アツい演奏」をお届けできるよう、頑張りたいと思いますので、会場にてお楽しみいただけたらと思います。会場でお待ちしております！

公演情報

2026
2/8日
第51回九州公演
日本フィル in Kyushu 2026宮崎
13:15開場／14:00開演

会 場：アイザックスターンホール
出演者：藤岡幸夫（指揮者）、周防亮介（ヴァイオリン）
日本フィルハーモニー交響楽団（管弦楽団）

【プログラム】
モーツァルト：歌劇「魔笛」序曲 K.620
ブルッフ：ヴァイオリン協奏曲第1番 ト短調 作品26
ストラヴィンスキー：バレエ組曲「火の鳥」（1919年版）
※藤岡マエストロによる解説付き

’25 みやざきの舞台芸術シリーズⅢ

体感型コンサート

～オーケストラで旅する名曲の世界～

みやざきの舞台芸術シリーズ第3弾は、

おとなも子ども、赤ちゃんも楽しめる「体感型コンサート」。

本公演を企画され、構成・編曲を手がける服部響さん、そして出演者のかみもと千春さんにお話を伺いました。



服部 響さん

かみもと 千春さん

Q.「みやざきの舞台芸術シリーズ」に応募したきっかけは？

服部 子どもが生まれたのがきっかけのひとつですね。子どもとコンサートに行こうと思ったとき、小さい子が入れるコンサートは少なく、あっても出演者が少ない。オーケストラによる色彩豊かな音楽を聴かせたい、と思うようになったんです。言葉も何も分からない0歳のころからオーケストラに触れられたらいいなって。

また、オーケストラって敷居が高いと感じている大人の方も多いですね。そこで、オーケストラやクラシックを気軽に楽しめる、大人も楽しめて小さいお子さんも楽しめる演奏会をしたいって考えるようになりました。ただ、オーケストラは出演者の数が多いので、みやざきの舞台芸術シリーズの助成を活用しながらできればと思い、今回のコンサートを企画・応募しました。

Q.タイトルの“体感型”にはどんな思いが？

服部 一方通行ではないコンサートにしたいと考えています。オーケストラの演奏やクラシックを聴き慣れていない人が、ただ聴かされている、という状態になるのはもったいない。出演者とお客さんの間にコミュニケーションが生まれる、そんな状態にしたい。音楽って、聴く耳だけでなく、からだの反応があって当然だと思うんです。視覚的に楽しんだり、ちょっと一緒に体を動かしたくなったり。それで“体感型コンサート”ってタイトルにしました。

かみもと クラシックって、筋骨をびしっとして聴かなきゃいけないのかなって印象ありますよね。打合せでは「こういう時、こう感じていいんだよ、みたいなことが伝わるといいね」って話をしていて。例えば、サン＝サーンスの「動物の謝肉祭」を聴いて、いろいろな動物が出てくるので一緒に体を動かしてみたり(笑)。出演者の日高啓介さんと一緒に「こう感じたから、こういうことやったら面白いね」って。私も日高さんも役者なので、あまりクラシックに詳しい立場ではないから、橋渡しのことができればいいなって。



日高啓介さん

服部 かみもとさんも音楽をされていて、日高さんもお芝居のなかで歌ったりされているので、音楽に親しみのある方々だと思います。だからこそ、クラシックの世界とクラシックに聴きなじみのない方々との間で、橋渡しをしていただけるのではと思っています。

かみもと 「これして怒れない?」「ここで踊ってもいい?」って打合せで聞いたりしています(笑)。



プログラム

サン＝サーンス：「動物の謝肉祭」より
ベートーヴェン：交響曲第5番「運命」より第1楽章
ビゼー：オペラ「カルメン」より前奏曲
ブラームス：ハンガリー舞曲第5番 など

Q.橋渡しのためにどんな“しかけ”が？

かみもと まだアイデア段階ですが、例えばカルメンの前奏曲でシンバルを叩きたい(笑)。オーケストラの演奏に入っていくなんて普段しないから、おもちゃとか身近なもので入っていったら面白いかなと考えています。あと、「運命」のジャジャジャーンに合わせて、絶望的なシチュエーションを演じるとか。そういう楽しみ方もできるよねって。

服部 感じ方に正解はないと思っています。お客さんには120%で“体感”してもらいたい。演奏で聴覚を、そして役者さんのパフォーマンスで視覚と触覚を楽しんでもらう。それに加えて、照明をこだわろうと考えています。クラシックの演奏会は照明がシンプルだけど、一人だけ照明があたると、雰囲気が一変する、受け取り方も変わるんじゃないかなと。そして、今回21人の演奏家が、21人分の音を届けるので、それをお客さんがどう受け取るのか、子どもたちがどう反応するか、そういうのも楽しみですね。

Q.お客さまにメッセージを。

かみもと 今、私の中で「体感」がすごいテーマなんです。感覚・感触って、自分だけのもの。だけど、最近の生活はそれが失われていくように感じています。このコンサートで、そういった自分の感覚・感触をもう一度味わう、お客さんとそれらを一緒に味わえる時間が過ごせたら良いなと思っています。大人の方も、ぜひ一人でも来てほしいなって思います。服部 子ども向けというわけではなく、大人も子どももフィルターのない状態で体感する演奏会にしたいと考えています。「誰も取りこぼさない」「分断されない」ってことが、私の最近のテーマとしてあって、非常に大事なことだと思っているので、そこにいるみんなで体感できる、心の分断もない演奏会になったらいいなと思っています。ぜひ“体感”しにお越しいただければと思います。

公演情報

2026
2/14±15日
’25みやざきの舞台芸術シリーズⅢ
体感型コンサート
～オーケストラで旅する名曲の世界～
両日も14:00開演

会場：イベントホール
構成・編曲：服部 響
指揮：土田 浩
出演：かみもと千春（劇団こふく劇場）、日高啓介
演奏：Nova Harmonia（ノヴァ・ハルモニア）



12/6 (土) 11:00開演 串間市文化会館 大ホール舞台上	はじめてのクラシック♪ #17 in くしま ～フルーツデュオ～ 【出演】熊谷 愛香(フルート)、壽山 智美(フルート)、高場 涼子(ピアノ) 全席自由 大人 500円 子ども(未就学児)無料	0歳から 入場OK!	受付終了
12/14 (日) 14:00開演 イベントホール	宮崎県立芸術劇場 開館30周年記念プログラム インドネシア伝統芸能団ハナジョス ガムラン・パーティー! 【出演】インドネシア伝統芸能団ハナジョス(ローフィ ささきひろみ) 岩本 象一、東山 真奈美、ナナン・アナント・ウィチャクソノ、西岡 美緒 全席自由 一般 1,000円 U25割 500円 3歳以下無料	0歳から 入場OK!	チケット完売
12/21 (日) 14:00開演 演劇ホール	TRES 沖仁×大萩康司×小沼ようすけ 【出演】沖 仁(フラメンコ・ギター)、大萩 康司(クラシック・ギター)、小沼 ようすけ(ジャズ・ギター) 全席指定 一般 4,000円(3,600円) U25割 2,000円 ペア割 7,000円(6,300円) ※前売りのみ ※未就学児入場不可		チケット発売中
1/17 (土)・1/18 (日) 14:00開演 演劇ホール	『飛び立つ前に』 作:フロリアン・ゼレール 翻訳:齋藤 敦子 演出:ラディスラス・ショラー 【出演】橋爪 功、若村 麻由美、奥貫 薫、前田 敦子、岡本 圭人、剣 幸 全席指定 S席:7,000円(6,300円) A席:5,000円(4,500円) B席:4,000円(3,600円) U25割:各席種半額 ※未就学児入場不可		チケット発売中
1/28 (水) 11:00開演 イベントホール	はじめてのクラシック♪ #18 ～ピアノ～ 【出演】佐賀 芽美(ピアノ) 全席自由 大人 500円 子ども(未就学児)無料	0歳から 入場OK!	<事前申込制> 12月9日(火) 受付開始予定
2/1 (日) 14:00開演 イベントホール	加藤昌則の「粋なり!クラシック」 【出演】加藤 昌則(ピアノ・ナビゲーター)、福川 伸陽(ホルン) 全席自由 一般 2,000円(1,800円) U25割 1,000円 ※未就学児入場不可		チケット発売中
2/8 (日) 14:00開演 アイザックスターンホール	第51回九州公演 日本フィル in Kyushu 2026 宮崎公演 【出演】藤岡 幸夫(指揮)、周防 亮介(ヴァイオリン)、日本フィルハーモニー交響楽団(管弦楽) 全席指定 S席:7,000円 A席:6,000円 B席:4,000円 U25割:各席種半額 ※未就学児入場不可		チケット発売中
2/14 (土)・2/15 (日) 14:00開演 イベントホール	25みやぎの舞台芸術シリーズⅢ 体感型コンサート ～オーケストラで旅する名曲の世界～ 構成・編曲:服部 響 指揮:土田 浩 出演:かみもと 千春(劇団こぶく劇場)、日高 啓介 演奏:Nova Harmonia (ノヴァ・ハルモニア) 全席自由・日時指定 一般 2,000円(当日2,500円) 高校生以下 1,000円(当日1,500円) 未就学児無料	0歳から 入場OK!	チケット発売中
2/23 (月・祝) 14:00開演 演劇ホール	ひなたのパロック #7 メランコリーの森 【出演】大塚 直哉(チェンバロ・お話)、平尾 雅子(ヴィオラ・ダ・ガンバ)、トークゲスト:森下 勇矢(ドイツ文学研究者) 全席自由 一般 2,000円(1,800円) U25割 1,000円 ※未就学児入場不可		12月14日(日) 一斉発売
3/14 (土) 11:00開演 アイザックスターンホール	パイプオルガン プロムナード・コンサート vol.177 「オルブラ」 【出演】原田 真佑(オルガン)、伊豆 諄子(司会・進行) 全席自由 3歳以下無料 4歳以上500円 なかよしチケット700円 ※4歳以上2人1組(前売りのみ)	4歳から 入場OK!	チケット発売中

Attention(ご注意)

◎記載情報は変更になる場合があります。◎()内はくれっしえんど倶楽部会員価格です。◎U25割は鑑賞時25歳以下が対象。その他の割引サービスの詳細は、劇場HPをご覧ください。
◎当日券が出る場合は、一般チケットのみ500円増になります。※一部公演除く◎託児サービス(有料・事前申込要)がご利用いただけます。※一部公演除く



劇場内に新しいカフェ&レストランがオープン!

—— 日常に、ちょっと特別なひとときを ——

劇場で過ごす時間の合間に、ちょっと立ち寄ってゆったり過ごせる場所ができました。

その名も **THE SANTEL(ザ・サンテル)**!

明るいテラス席や落ち着いた個室を備えた、全78席の新しいカフェ&レストランです。

ランチは、サラダバー付きブッフェにパスタやピザ、肉料理など多彩なメイン、デザートやドリンクまで楽しめます。

午後はカフェタイムとして、友人やご家族との語らいに。ディナーはコースやアラカルトで、特別な時間を気軽に味わえます。

劇場の休館日でも営業しており、年末年始(12月30日～1月3日)を除き、いつでも訪れることができます。(※カレンダーにより変更の可能性あります)

公演や練習など、劇場でのさまざまな時間とあわせて、劇場での時間を、もっと楽しく彩るひとときをどうぞお楽しみください。

劇場「くれっしえんど倶楽部」会員さま特典

会員証のご提示で
ご本人に限り **10%割引**



Instagram
@the_santel.

THE SANTEL(ザ・サンテル)
TEL 0985-65-8888 営業時間 11:00～21:00




お問合せ

宮崎県立芸術劇場
MIYAZAKI PREFECTURAL ARTS CENTER

〒880-8557 宮崎市船塚 3-210
https://miyazaki-ac.jp/

TEL.0985-28-3208 FAX.0985-20-6670
Instagram @the_santel.

随時更新中!「フォロー」と「いいね!」お待ちしております